

「卒業生調査」からみる学生生活

菅野 幸恵

〈要旨〉

本稿では2007年および2008年に行った卒業生調査のうち、学生生活に関する質問を中心にまとめた。学生生活の各側面についての意義を年代別に検討したところ、「クラブ活動」や「アルバイト」以外については年代別による差は顕著ではなく、どの年代でも「講義」や「友人とのかかわり」に大きな意義を感じていることが明らかとなった。「教師とのかかわり」については、個人差が大きいことが考えられた。「クラブ活動」や「アルバイト」は学内でのクラブ活動の活発度や社会状況が関係していることが考えられた。短大生活で印象に残っていることを尋ねた自由記述の質問から上記のことが裏付けられた。

キーワード：卒業生調査、学生生活

1. 問題と目的

本稿では2007年および2008年に行った第6回の卒業生調査の未分析部分の検討を行う。2010年の年報では就職活動と就業状況を中心にまとめたが、今回は学生生活に関する質問を中心にまとめる。具体的には、「講義・授業」「キリスト教教育」などの項目についてその意義を尋ねた設問と、「短大生活のなかで、今なお印象に残っていることがあれば、お書きください」という自由記述設問を分析の対象とする。そこから卒業生が当時の学生生活をどのようにとらえているのかを明らかにしたい。

2. 調査の方法

1) 調査方法

調査は2007年と2008年に行った。過去に行われてきた卒業生調査の項目を参考に、質問紙を作成し、郵送によって調査を行った。対象となったのは創立時から2005年までに卒業した卒業生4,087名である。調査の対象の抽出方法等は菅野（2010）で述べた通りである。回収された質問紙の総数は1,404で、回収率は34.3%であった。分析は卒業年度未記入分を除いた1,369名分を対象に行った。

2) 分析方法

分析にあたり、調査の対象となった卒業生を卒業年によって次のようなグループに分けて比較を行った。

表1 卒業年によるグループ分け

卒業年	調査時の年齢
①～1960年卒	60歳代後半から70歳代前半
②1961年～1965年卒	60歳代
③1966年～1970年卒	50歳代後半から60歳代前半
④1971年～1975年卒	50歳代
⑤1976年～1980年卒	40歳代後半から50歳代前半
⑥1981年～1985年卒	40歳代
⑦1986年～1990年卒	30歳代後半から40歳代前半
⑧1991年～1995年卒	30歳代
⑨1996年～2000年卒	20歳代後半から30代前半
⑩2001年～2005年卒	20歳代

今回分析の対象とするのは質問のうち「本学ですごした学生生活を振り返ってみて、次のような事柄についてどのように思いますか。それぞれの項目について最も近いと思われるものをひとつ選んでください。」という設問に対する回答と、「短大生活のなかで、今なお印象に残っていることがあれば、お書きください」という自由記述設問である。学生生活については、「講義・授業」「キリスト教教育」「教師との個人的接触」「学内での友人との交わり」「クラブ活動」「アルバイト」「学外での友人との交わり」について、「非常に有意義だった」から「まったく意味がなかった」の6段階で尋ねた。

3. 学生生活の評価

1) 講義・授業について

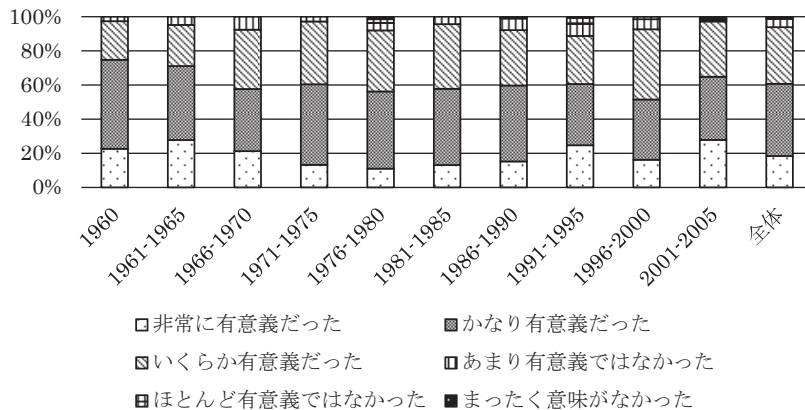


図1 講義・授業について

比較的どの年代でも有意義だったと感じている。今回対象となった卒業生にとって、本学の講義は意義あるものであったということがうかがえる。

2) キリスト教教育

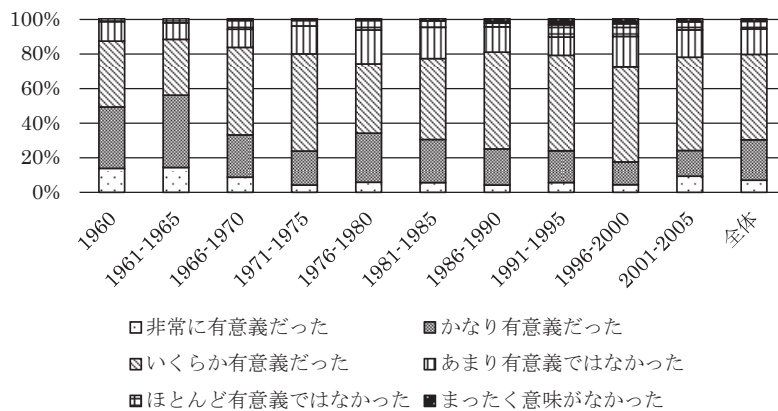


図2 キリスト教教育について

講義ほどではないが、比較的どの年代でも有意義だったと感じている人が多い。

3) 教師との個人的接触

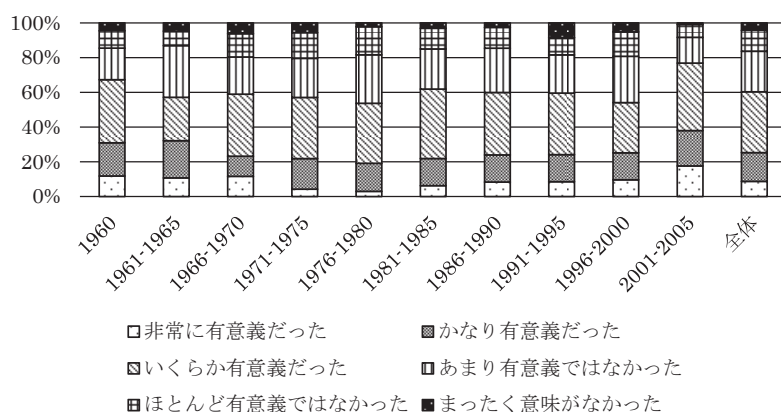


図3 教員との個人的接触について

有意義だったと感じている人は60%前後で推移している。講義に比べると、有意義でなかったと回答した人が多い。本学では少人数教育を一つの特色としており、教員との人格的交わりのなかで学びを深めることを目的としているが、教員との個人的な交わりが充実していた人とそうではない人の差が大きいということだろう。

4) 学内での友人とのかかわり

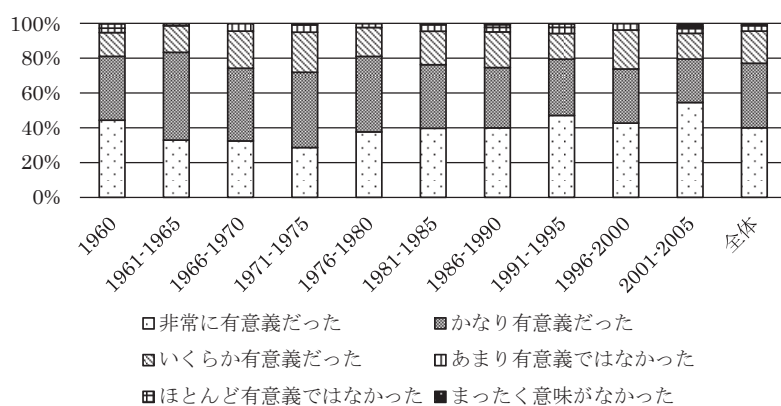


図4 学内での友人とのかかわりについて

どの年代でも9割以上の卒業生が有意義だったとしている。私立短期大学協会が2010年に行った学生生活に関する調査においても、学生生活の満足度を尋ねたところ、「なんでも話せる友だちの存在」がダントツに高かった。さらにその割合は男子よりも女子が高

く、女子学生にとって友だちの存在が学生生活の満足度につながっていることがうかがえる。

5) クラブ活動

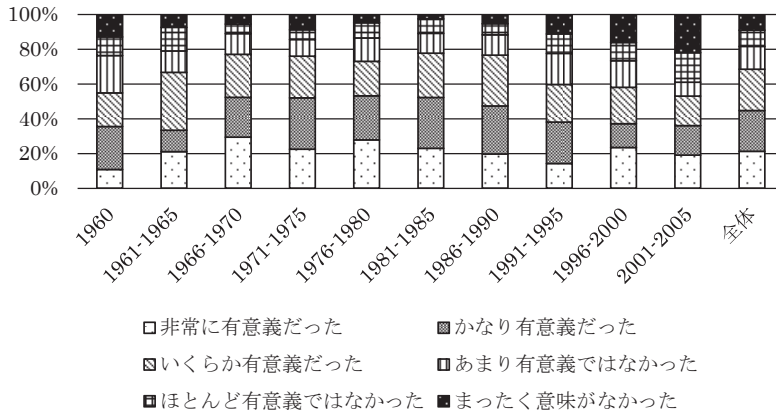


図5 クラブ活動について

この設問は年代による差が顕著である。最初期と、1990年代以降は有意義だったという回答は少ない。1960年代後半から1980年代までは有意義だったという回答が多い。これはクラブ活動自体の活性化状況と関連していると思われる。そこで、学友会所属クラブ数の推移について図6にまとめた。集計は1966年から1980年までは、学友会誌「あおやま」に掲載されているクラブ紹介を、1981年以降は「学生生活の手引き」に掲載されているクラブ一覧を参照した。1958年から1965年までは「あおやま」11号に掲載されていた体育会系クラブの歴史を参考に算出した。その間の文化部については記述がなく不明である。なお休部中のクラブは含まれていない。図を見ると、1970年代から1980年代にかけて、特に文化系クラブの数が多く、活動が活発に行われていたことが推測される。このことが有意義と感じるものの多さに関係しているのではないかと考える。一方、1991年以降有意義であったと回答する割合が減っていくのは体育系を中心にクラブ数が減少していくことと関係していることが考えられる（文化系は2002-2003年にかけて新しいクラブが誕生して一時的に増加するが、翌2004年には休部になるクラブが続出している）。クラブ数だけではなく、クラブに所属する人数の集計ができればもっとはっきりしたつながりが見えてくるかもしれないが、手掛かりとなる資料が乏しく本稿では検討できなかった。短期大学協会の調査では、クラブ活動に参加している学生は全体の4割程度であった。女性学生の方がクラブ活動に対する関心が高いとされており、クラブ活動に参加することで学生生活が充実していることが考えられる。

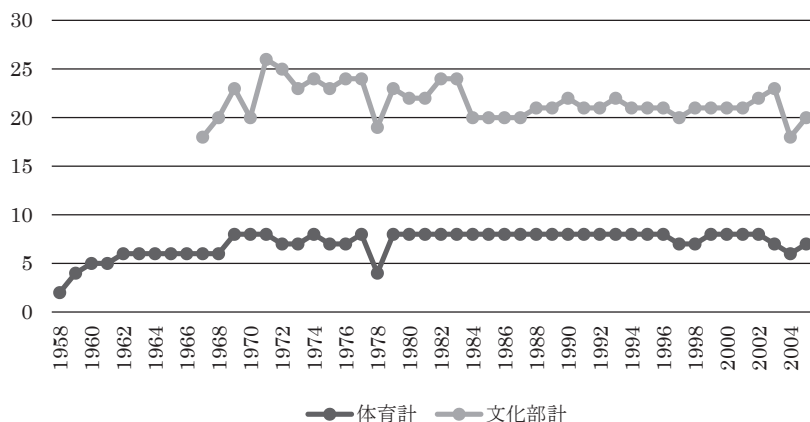


図6 学友会所属クラブ数の推移

6) アルバイト

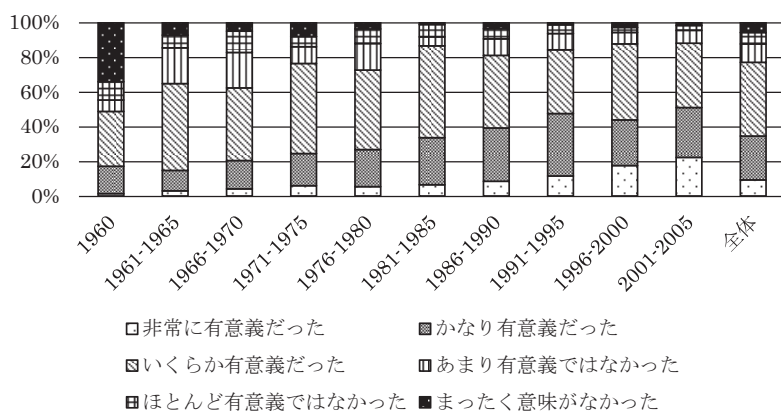


図7 アルバイトについて

最初期は全く意味がないという回答が多い。1980年代以降有意義だったと感じている人が80%前後となる。1960年までは短大生がアルバイトすることが少なかったことが推察される。過去のアルバイト経験を尋ねた調査では、1980年代に大学時代を過ごした人からアルバイトの経験率が高くなることが分かっている。日本の経済が安定する以前の1970年ころまでは大学生のアルバイトは一般的ではなかったことがうかがえる。過去の卒業生調査(工藤ら)で「在学中力を注いだものは何か」という問いに対して、1991年から1995年に卒業した世代から「アルバイト」と回答するものが増えていると指摘されている。2010年の短期大学協会の調査では、授業以外でもっとも時間をかけているのは何か、という問いに対して「アルバイト」を挙げたものももっとも多かった。学生にとってアルバイトをすることが一般になってから以降は、学生生活のなかにアルバイトの占める割合が多い傾向

は現在にまで引き継がれていることが考えられる。

アルバイトをする理由としては、さまざまなものが考えられるが、その一つとして家庭からの援助だけでは生活が成り立たないため、ということもあるだろう。日本学生支援機構が平成24年度に行った調査では大学生の7割以上がアルバイトに従事していることが示されている。なかでも家庭からの援助だけでは生活が不自由・困難と感じる学生の従事率が高いことが示されている。今回の結果から考察できることには限りがあるが、家庭の経済状況も彼女たちのアルバイトをめぐる状況に大きく関わっているということは述べておきたい。

7) 学外での友人との交わり

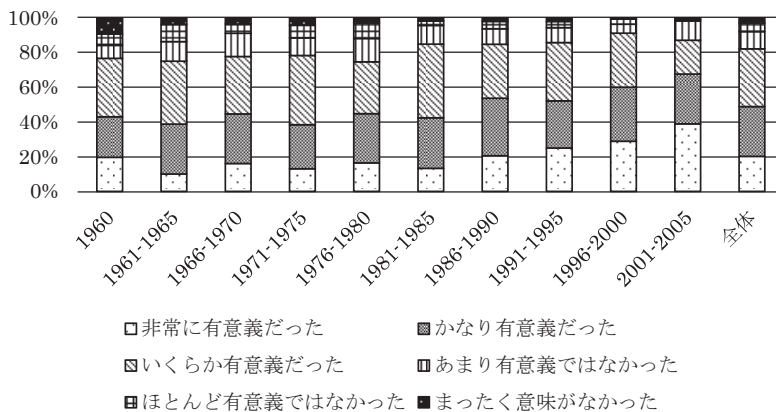


図8 学外の友人とのかかわり

1980年代以降有意義だったとする卒業生が80%を超えるが、それ以前も有意義だったと感じている卒業生の割合は多い。年代を超えて学外の人との交流はあったことがうかがえる。

4. 自由記述から

1) 分析方法

「短大生活のなかで今なお印象に残っていることがあればお書きください」という自由記述設問の回答を読み、「友人」「講義」「教員」「行事」「環境」「クラブ活動・サークル」「キリスト教育」「寮」の7つのカテゴリに分類して分析した（表2）。分析は自由記述の回答のあった801名を対象とした。

表2 カテゴリの内容

カテゴリ名	内容
友人	友人との思い出に関するもの。
講義	講義全般に関するもの。教育実習なども含む。
教職員	教職員との個人的な思い出に関するもの。○○先生の授業という記述の場合はこちらに分類した。
行事	入学式、卒業式、青山祭、各学科で行われていたオリエンテーション、修養会、など行事に関するもの
環境	学食や図書館、中庭、銀杏並木といったキャンパスの物理的環境、キャンパス全体の雰囲気、青山という立地に関するもの
クラブ活動・サークル	クラブ活動、サークルに関するもの。青学大や他大学のサークルも含む。
キリスト教教育	礼拝やキリスト教教育に関するもの。クリスマス礼拝や点火祭についての記述は行事に分類した。
寮	寮生活に関するもの
留学	留学に関するもの
アドグル	アドバイザーグループに関するもの
その他	上記のカテゴリにあてはまらないもの

2) 結果

分類結果を図9に示す。もっとも多く記述があったのが、「友人」に関することであった。次いで、「講義」「教員」と続き、「行事」「クラブ活動・サークル」が並び、「キリスト教教育」「寮」「環境」と続いている。ここでは、5%以上のものを記述が多かったものから取り上げ、具体的な内容を交えながら考察する。

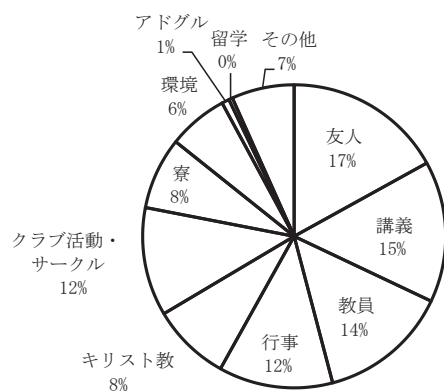


図9 各カテゴリの割合

①「友人」

とても素晴らしい友人に出会えたこと。勉強の面では、皆一人一人がとても熱心で、しっかりとした考えを持っていて、その友達からたくさんのことを学ばせてもらった。1986年家政学科卒

今それぞれの分野で活躍している友人に出会えたことが本当に貴重なことだった。1990年英文学科卒

先に述べたように、女子学生にとって気のおけない友人の存在は学生生活の充実に欠かせない。学生食堂や中庭などで交わした何気ないおしゃべりの時間を思い出すという回答も多く、学生時代を語るときには友人の存在が中心となっていることがうかがえる。青年期を生きる大学生にとって自己形成の面でも友人関係は重要な役割を果たしている。とりわけ女子青年はそのアイデンティティ形成に他者の存在が大きく関係していると言われる(杉村、1999)。記述には「一生の友人に出会えた」とする回答も多く見られたが、自分を語るときに短大時代の友人の存在が欠かせないということだろう。

②「講義」

講義は友人に続いて多く挙げられた。先の学生生活の意義を尋ねる質問でも講義に意義を感じている卒業生の割合は年代を超えて多かった。

国文学科の講義で1人の作家の研究に関わり、その作家に思いがけず大きな影響を受け、良い経験になった。1999年国文学科卒

英文学科だったので、英語の授業内容がかなり充実していた。特に会話のスキルが上がった。1986年英文学科卒

授業が楽しかった。自己の表現力や心を豊かにすることを教えてもらった。1992年児童教育卒

教養学科だったが、英語の教育も随分沢山受けた気がする。広く浅く様々な分野の授業を受け、自分にとって大変プラスになった。1979年教養学科卒

様々な分野の「芸術」を学べたこと。(特に染織)好きな短歌や万葉集の研究に没頭できたこと。2000年芸術学科卒

一般の講義だけではなく、ゼミ(卒論指導)や実習(実技や教育実習)をあげる人もいた。

一般の講義では得られない密な時間を体験していたことがうかがえる。

ゼミでの先生・友人との議論。学ぶ楽しさを味わえた。1993年教養学科卒

卒論をとても自由に書かせてくれ、楽しく書くことができた。個人のキャラクターをそのまま受け止めさらに伸ばしてくれる校風がとても素晴らしいと感じた。2004年家政学科卒

家政学科でも、デザインコースだったので、アクセサリーを作ったり、木工で椅子や本棚を作ったことなどが印象に残っている。1979年家政学科卒

短い時間の中で教職をとったことは有意義だった。卒業後具体的にその資格を生かすこと

場に立つことは、今のところないが、教育実習やその前の過程での学習はためになったと思う。1990年国文学科卒

一方で、充実している分、学びの中身の濃さについていくことの大変さを改めて思い込んでいる記述もあった。

2年間というのは本当に忙しく、英文科で予習には時間がかかり（辞書引きに時間が割かれた）、アパートと学校の往復で2年生になっても時間的ゆとりがなかった。学生生活を楽しんだという思い出はない。ゆとりあるカリキュラムで大学生活を楽しんでみたかった。

1965年英文学科卒

二年という短い期間だったのであつという間だったという思い。授業がとても忙しく朝から夕方までぎっしり授業が詰まっていたという印象がある。1973年家政学科卒

③「教職員」

教職員に関する回答のほとんどは教員についての思い出であった。教員に関する回答からは、友人とのかかわりとはまた別のかたちで、教員の存在が卒業生たちの人間形成に大きく関わっていたことがうかがえる。

卒業してかあら素晴らしい先生方に教えて頂いたと2年間の勉強の足りなさをもったいないと反省するしきりである。人間として尊敬でき、それを身をもって伝えてくださる先生ばかりだった。1973年児童教育学科卒

尊敬できる教授に出会え、学問だけでなく、人間として、教えていただくことが出来たこと。1990年英文科卒

親身になって指導してくれた先生がいて、卒業後も交流がある。このような先生がいるのも小規模ゆえだと思う。2004年英文科卒

「個性的な先生方」など教員全般に刺激を受けたとする回答も多かったが、固有名詞をあげてその教員の影響の大きさを語る回答も目立った。興味深いのは卒業後時を経てもなお、いや経たからこそその言葉の意味が響いてくるということである。

〇〇先生が連れて行ってくださった「奥の細道」の旅はすばらしいものだった。〇〇先生の素晴らしさを年追うごとに感じる。その他、教授陣の素晴らしさに当時気づかなかったことが残念。1967年国文科卒

〇〇先生の言っていたことが当時はよく解らなかったが、今やっと理解できるようになった。1993年児童教育学科卒

④「行事」

行事として多くあげられていたのは、クリスマス礼拝、クリスマスツリー点火祭、青山祭であった。キリスト教関係の行事が多く挙げられているもの後述するキリスト教教育との関連も踏まえると興味深い。単純な行事というよりも学びとの関連のなかでその行事の意味を感じることができるからこそ、より思い出深いものになるのではないだろうか。そ

の他学科独自の行事をあげる者もいた。

キリスト教徒ではないが、点火祭に参加して以来、X'masには神様や自分に関わりのある人達に感謝し、おごそかな気持ちで迎えるようになった。今でも可能な限り、点火祭には行くようにしている。1988年英文学科卒

中軽井沢でのオリエンテーションはとても楽しかった。1970年英文学科卒

キリスト教的な行事や、賛美歌が流れ、パイプオルガンも弾くことができた。学科発表会で皆で出し物を発表したこと。1989年児童教育学科卒

⑤「クラブ活動・サークル」

クラブ活動に参加した学生にとってはその存在が大きいことがうかがえる。ただクラブ活動に熱中し過ぎて学業がおろそかになったり、2年という短い時間に限界を感じたという記述もあった。

ワンダーフォーゲル部に入部し、活動を通して色々な事を学び、よい友人を作ることができた。クラブ活動に明け暮れた2年間だった。そのことが今の心の支えになっている。1969年英文科卒

ESSのドラマセクションに所属し学校内外の同年代の人達」との交流を今でもよく覚えているし財産になった。1983年英文科卒

クラブ活動に明け暮れたこと。クラブも講義も2年は中途半端で、4年制に進めばもう少し有意義だったと思うし、人間としてもっと成長できたように思う。1987年英文科卒

⑥「寮」

寮生活を送った人にとっては、その存在は短大時代を語るときに欠かせないだろう。生活を共にする寮の友人は学科の友人とはまた違う存在として、彼女たちの東京での生活を精神的な面からの支えとなっていたことがうかがえる。

シオン寮でできた友人と、その絆は何物にもかえ難いものになった。一生の友人が何人もあるということはすばらしい。1991年児童教育卒

シオン寮での生活。地方出身者にとって不安な新生活のスタートだったが、寮監の先生や先輩方は優しく迎えてくれ、何ともアットホームな雰囲気、間もなくして“楽しい学生生活”を実感することができた。1987年教養学科卒

私はシオン寮でたいへんお世話になった。共同生活をしてお友達の大切さ、ありがたさを人生の中で最も感じたときである。ほかの大学と受けて落ちこちらにお世話になったのだが、勉強関係はさておき、寮生活の恩恵を存分に受けて、人生へこぎだすことができたのは本当に幸いなことだった。親元を離れ、たくさんの方の考え方感じ方を肌で受けながら人と人のお付き合いのベースもここで育てられたような感じがする。世間知らずの私が寮でたくさん学べたことは、私の人生の中でこの二年間がひとときわ今でも輝いている。机上の経験ではなく、実生活においての経験は最も尊い。1979年家政学科卒

⑦「キリスト教教育」

本学の学びの柱である「キリスト教教育」は、短大で学ぶまでキリスト教とはかかわりのなかった人にとっても大きな存在となり、卒業生たちのものの見方や考え方に少なからず影響を与えたようである。

私はキリスト教徒ではなかったが、キリスト教学の時間、礼拝、修養会への参加等は、心洗われる時間だった。1978年国文科卒

それまで縁のなかったキリスト教を学び、考え方や感じ方に影響があった。1988年家政学科卒

今まで無縁だったキリスト教にふれることができたこと。牧師の方のあたたかいお話をうかがうことができたことが、心の豊かさにつながった。社会に出て思い悩むことがあっても、強い心の支えになった。2000年英文学科卒

⑧「環境」

環境として挙げられていたのは、学食や図書館、中庭、銀杏並木といったキャンパスの物理的環境だけではなく、キャンパス全体の雰囲気、青山という立地に関するものもあった。キャンパス内の建物や雰囲気だけでなく、青山という立地に関する記述は興味深い。彼女たちの学生生活を語る上で、この立地のよさと切り離して考えることは難しいということだろう。

充実した図書館で落ち着いて勉強できた。1979年国文科卒

中庭の芝生に座りゆっくり友人達とおしゃべりをしたこと。1974年国文科卒

緑が多かったのも、季節の移ろいを感じられた。2005年家政学科卒

キャンパスの美しさ、活気に溢れ、全てがキラキラしていたように思われる。1967年英文学科卒

クリスマスシーズンの学内はとて華やかでキリスト教系大学ならではの雰囲気にあふれていた。点火祭。1986年国文科卒

立地の良い場所のできたキャンパス。短大時代のことを思い出すといつも華やかな気持ちになる。1987年国文科卒

毎日表参道、青山、渋谷の街を歩いて様々なモノ、ヒトを見ることがとても刺激的だった。1987年児童教育学科卒

短期大学協会が行った調査でも、大学の満足度を構成する重要な要素として「大学の雰囲気」が挙げられていた。キャンパスのたたずまいや学生の雰囲気は学生生活の満足度を左右する重要な要素であることが見えてくる。

⑨その他

その他は上記のカテゴリにあてはまらないものであるが、内容を見てみると、短大生活に関するネガティブな記述がいくつかあった。自由記述の内容のほとんどはポジティブな

思い出であったが、ネガティブな思い出から彼女たちの学生生活を考えることも重要である。いくつかピックアップしてみたい。

ネガティブな記述としてまず挙げられるのは学生生活に対する後悔の念である。規律の厳しい女子校から進学したので、自由な校風の下で生活できたことが、とても嬉しかったが、特に目標も持たずに過ごしてきたことを後悔している。目標を持てば、わずか二年でも有意義だったと思う。1968年英文科卒

2年間という短大生活の短さをあげる回答も目立った。同じ2年間でも人生のなかで忘れたい時間になる場合もあれば、一瞬のうちに過ぎ去った時間としてあまり印象に残らないものになる場合もある。

とにかく短すぎてあまり自分のためになることができなかった。1989年英文科卒
人生において2年間はあまりにも短く、一瞬のことで今となっては印象に残っていることもない。1981年教養学科卒

元来、スロースターターで、想像していたより忙しかった短大のカリキュラムの中でなかなかペース、自分の目標がつかめず、2年間の中盤以降、ようやく学ぶことの面白さを感じ始めたところで就活、卒業を迎えてしまったという思いがあった。自分には短大のペースが向いていなかったのではないかという感覚が残ったのを覚えている。1985年英文科卒

5. まとめ

学生生活の意義を尋ねた設問では、卒業年に関わらず、「友人とのかかわり」や「講義」を有意義だったと回答する卒業生が多く、自由記述の設問でもそれら二つを印象に残っていることとして挙げる卒業生が多かった。彼女たちの学生生活を語る上で両者が欠かせない存在であること、両者が充実していることが学生生活全体の満足につながることが考えられる。「教員とのかかわり」については、個人差があることが推測されたが、自由記述の内容から、かかわりが濃かった場合には学生時代のみならず現在にいたるまで彼女たちの人間形成に影響を与え続けていることが考えられた。また、卒業生にとっての学生生活は、友人、教職員、講義など生活の中身に関することだけではなく、学びを支える物理的な環境にも影響されることが考えられた。全体的に学生生活をポジティブにとらえた回答が目立ったが、少数ながらネガティブな記述もあった。とりわけ2年間という短大生活の短さを挙げる回答は彼女たちの学生生活を振り返る上で重要な視点であると考えられる。もちろん卒業生調査で明らかになる学生生活は、振り返ってのものであるので、当時の学生生活そのものではない。それでも生き活きとした学生生活が浮かび上がるのは、彼女たちにとってどれだけ学生時代が充実して豊かであったのかを示しているのではないだろうか。

参考文献

- 工藤恵理子他 1997 「卒業生調査」報告 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報 5号
99-142頁
- 菅野幸恵 2010 「卒業生調査」報告—質問紙調査とグループインタビューから— 青山学院
女子短期大学総合文化研究所年報 17号 67-82頁
- <http://www.zephyr.dti.ne.jp/~kmorioka/0104arbit1.pdf> 取得日2015年8月30日
- 日本私立短期大学協会 2011 学生生活に関する調査報告書 vol2
- 日本学生支援機構 平成24年度学生生活調査結果
- 杉村智美 1999 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子編『女
性の生涯発達とアイデンティティ』北大路書房 55-86頁

College life as revealed from a graduates' survey

Yukie SUGANO

This paper focused on a survey of graduates conducted in 2007 and 2008, and summarizes their responses to the questions relating to college life. The results of an age-group specific study on the significance of various aspects of college life showed that there were no marked differences according to age, other than in terms of club activities or part-time jobs. Further, the respondents felt “classes and lectures” and “relationships with friends” were highly significant in college life. Large individual differences were believed to exist in terms of “relationships with teachers.” In terms of “club activities” and “part-time jobs,” social circumstances and the degree of activeness in the on-campus club activities were believed to be related. These findings were supported by the respondents' free descriptive answers to the question that asked them about the things they remembered the most from their days in junior college.

Keywords : graduate study, college life
